

前むけ前

熊本県阿蘇市 感王寺 美智子

2016年秋。東日本大震災から五年半が過ぎ、私が暮らす仮設住宅も、来年、取り壊しが決まった。毎週のように、引越の小さなトラックを、みんなで見送る。

「オラ、行きたぐねえ。寂しいっぺ」

日本舞踊の師匠である、サトばあちゃんの喝が入る。

「こら、シャキッとせい！前向け前！」

扇子で、引っ越して行くおじさんのお尻を、ペシッと、叩いた。サトばあちゃんは、この仮設のムードメーカーだ。

「前向け～前！」

そして、出て行くトラックに、手を振る。

いつもの見送りの風景だ。ただ、手をふる人達の数、ひとり、ふたりと減って行く。

サトばあちゃんが、振り返って言った。

「さあ、みなさん、来週は、私も行きます。前さ、向いて行きます」

翌週、サトばあちゃんは、陽気に、優雅に、シャナリ、シャナリと、踊りながら、仮設住宅を出て行った。

サトばあちゃんの笑い声が、消えた仮設住宅は、急に静かになった。ベンチの前で踊っていた姿も、もう、ない。

サトばあちゃんが越して、二週間程過ぎた頃だ。日が暮れかかったベンチに、ぽつんと座る、サトばあちゃんの姿があった。

「どうしたの？」

「いや、ちっと、忘れもんさ」

ちよっと、戸惑ったそぶりをみせた。

「ばあちゃん！」

みんなが集まってきた。久しぶりに、ベンチに、笑い声が響いた。

サトばあちゃんは、しばらくすると、シャナリシャナリと、いつものように踊りながら、新しい住まいである、災害公営住宅へ帰って行った。

翌日も、サトばあちゃんは、来た。そして、その翌日も。

「ばあちゃん、どうしたんだ？」

「いや、ちっと、忘れもんさ…」

「寂しいんか？」

ばあちゃんは、コクッと、ためらいがちに頷いて、すまなそうな笑みを浮かべた。

「立派な広い部屋に、入れてもらうたのに、んなこと言っちゃいげね。前を向かなきゃいげね。わがってるだとも。すみません、すみません」

仮設住宅の暮らしは、狭くて寒くて、不便だらけだった。けれど、震災で、何もかも失くしたみんなが、共に励まし合い、生きていく暮らしの中で培われた、思いやる心と強い絆が、あった。

災害公営住宅は、広く快適ではあるが、そのコミュニケーションを、また一から、築き上げていくのは、容易ではない。まして、高層で閉ざされた空間に住んだ経験のない、ひとり暮らしのお年寄りには、どうしてよいのか、わからないのだ。

「日が暮れる前に送ってくから」

ばあちゃんの手をとり、立ち上がった。

すると、中学校の生徒たちが、駆け寄ってきた。

「私たちも送って行きます」

この仮設住宅は、中学校の校庭に建てられていて、サトばあちゃんは、生徒たちにも人気者だったのだ。

—ゆうや一け、こやけえの、赤とんぼ〜—

夕焼けに染まる川の土手を、おばあちゃんを囲んで、みんなで、歌いながら、歩いた。

ピシャッ！川で魚が跳ねる音がした。

「鮭だ！鮭が戻ってきた！」

逞しく、遡上してきた鮭の姿があった。

災害公営住宅に着くと、入口に数人の人影があった。

「ばあちゃん！」

「心配してたっちゃ！」

住民の人達の心配そうな顔が、並んでいた。

「いや、ちっと、ちっと……」

扇子で顔を覆った、サトばあちゃんの小さな肩が震えていた。

同じ仮設から引っ越して来ていた、おばさんが、その肩に手を置いた。

「ばあちゃん、前を見ても、後ろを見ても、どっちも見ても、いいんだよ。前にも、後ろにも、みんな、いるから」

中学生の女の子が言った。

「ばあちゃん、私たち、気仙沼さ、いい未来にすっから。ばあちゃんが、どこで暮らしても、さびしくない街に、すっから」

真っ赤な、真っ赤な、夕焼けが、みんなを優しく包みながら沈んでいった。

明日、また昇るために。